

編集後記

昨年は、3月末日をもって、文学部の加島大輔先生が東京薬科大学への転出なさいました。2009年の4月に愛知大学の文学部に助教として来られてから、15年近く愛知大学の教職課程にてご尽力いただきました。加島大輔先生が愛知大学の教職課程を現在の運営形態に作り上げて下さったといえるでしょう。その功績は大です。愛知大学の教職課程の様々なシステムの細部を決めて頂いております。たとえばこの教職課程研究年報誌の基本的なレイアウト、冊子サイズなどは加島大輔先生が定めたものです。ある意味、加島大輔先生の手の平の上で私たちは日々のお仕事を遂行しているとも表現できますね。また愛知大学の本間喜一先生とは同じ山形県のご出身であり（お互いに隣町のご出身となるそうです）、愛知大学と山形県の縁をつなぐ人でもありました。丁寧な仕事ぶりや学識から多くの同僚や学生から頼られる存在でもありました。この編集後記を書いている岡田は、時代小説で有名な藤沢周平氏のファンなのですが、山形出身の藤沢周平氏が小説のなかで描く山形だと思われる藩の物語に出てくる人々に感じる人柄の良さや深さを加島大輔先生にも強く感じておりました。2023年3月の時点では、愛知大学の教職課程において一番の古株とも目され、なにかについて、加島大輔先生の判断を仰いで皆が頼りにしておりました。正直なところ、突然のご転出でしたので、みな驚いたのですが、加島大輔先生が新天地、東京という日本の中心地においてさらに日本の教育、教職課程の発展に寄与される活躍を見てみたいという気分です。ご活躍を祈念しております。

そして2023年9月1日から、静岡大学より松尾由希子先生に来ていただきました。この研究年報の編集後記を書いている時点では赴任されて1ヶ月半ほどですが、すでにご活躍していただいております。昨年赴任していただいた山川法子先生とは大学院生時代に隣の研究室で友誼があったとも聞いております。縁のある方が集まり、愛知大学の教職課程での教育、研究がますます盛んになることを期待しております。

今年度は、コロナ対応のレベルが0となり、マスクを外す学生も多く、基本的にはコロナ以前の日常が戻ってまいりました。それでも以前の学生に比較すると、何か異質感があるように感じております。学生同士の交流が若干弱く、集団の形成や交流の果たす機能が低い印象です。以前のような雰囲気に戻ることはないのかもしれませんが、コロナ禍という世界史的な出来事が我々の生活、教育に与えた影響を長い目で捉えたいものです。

(岡田圭二)

愛知大学教職課程研究年報 第13号

2024年2月20日発行

編集・発行 『愛知大学教職課程研究年報』編集委員会

〒453-8777 愛知県名古屋市東区平池町四丁目60番6

(電話 052-564-6112)

印刷 株式会社 コームラ
